

原研に入るまで

佐藤 一男

私が原研の大卒公募第一期生の一人として採用されてから、今年で 50 年になった。採用された 4 月 8 日に、私たち同期生の 50 年の会を開いて、私もそれに参加させていただいた。いろいろお世話をして下さった幹事の方々に、厚く御礼を申し上げたい。

その同期生の文集が、この度編集発行されることになったという御案内をいただいた。さて何を書こうかと考えたが、ここでは一つ、私が原研に採用されるに至った経緯などを御紹介してみたい。

私は、工学部電気工学科の出身である。今はどうか知らないが、50 年ほど前は、電気工学科にはなかなか秀才が集まっていて、私の学科の成績は誠に芳しくなかった。そればかりではない。電気工学というのは実に壮大な学問の体系で、そのほんの一端に触れただけで、これはとても大学で数年噛ったぐらいの若造が口を出せるものではないと思い知らされ、甚だ意気阻喪した日を送っていた。そのうち 4 年生になって、卒業論文のテーマを決めなければならない。テーマ候補の一覧を見ると、その少し前にアルゴンヌの原子炉学校 から帰国された大山彰助教授(後の原子力委員長代理)のところで、原子力に関する勉強が出来ることがわかった。これなら電気に対して抱いていた劣等感から解放されるかもしれない、と思ってサ-マル・ブリーダ- (Th-232/U-233 の重水均質増殖炉) について勉強を始めることにした。

何しろ当時は、日本も原子力の研究が解禁され、また、アイゼンハウアーの「Atoms for Peace」のスローガンの下に、原子力の平和利用が世界的に開始され、第一回のジュネーブ 会議が開かれた直後のことである。大山先生のところには、ごく少数だったが私たち学部の学生、大学院生や研究生、更には他の学科の長老の教授などまでもが集まって、原子力の入門書の輪講をしたりしていた。サ-マル・ブリーダ-の勉強もそこそこ進み、ブランケットの Th-233/Pa-233 の抽出処理率を最適に選定することによって、増殖比を最大にできる、などなどの結論を得て、何とか卒業することができた。ところが、私の次の学年でこれを引継いで、私の結論は計算にまちがいがあり、処理率を上げるほど増殖比は向上する、という結論を導いた男が現れたそうだ。まったく世の中には余計なことをする奴もいるものだ。

その年、昭和 31 年の 6 月に特殊法人日本原子力研究所が設立された。当時は特に学界にはアンチ原子力の風潮があり、そのため、当時の原研の首脳は職員の募集に苦労したそうである。当時の安川理事長、駒形副理事長はともに電気工学科の先輩で、何とか学生を回してくれと主任教授に頼んできたという話を聞いた。私と、同期の松田泰君とが、入所試験だけは受けるようにと勧められ、ともかく試験を受けた。問題は当時の原研の研究者たちが作ったらしかったが、何ともひねくれた難問があり、甚だできが悪くて、これでは合格するはずがないと思った。

原研へ願書は提出したものの、その時には原子力を生涯の職業にしようと固く決意していたわけではなく、福島県出身の私の言わば地元である東北電力にも願書を出していた。こちらからは、健康診断をして異常なければ採用するから仙台に来るように、という手紙が来た。そこで主任教授にこれから行って参りますと報告したところ、教授はちょっと待てとって原研に電話をした。そうしたら、原研も採用の予定であるという返事だったそうである。二つ以上合格した時は、先に決まった方へ行くというのが不文律だから、おまえは原研に行けといわれた。これが私が原研に入所するに至った顛末である。なお、松田君は病気で休学していて復学直後だったため、健康診断で不合格とされ、原研には入らず、通産省から科学技術庁の原子炉規制課長、東北電力副社長、原子力発電技術機構の理事長などを歴任して、結構原子力とは縁が深かったようである。彼と私は、卒業後しばらくの間、同期生の中で、給料の最下位争いをしたものである。

このように、原研に入所が決まったのは、自分の意思よりは周囲の状況に流されてのことであったが、でもその後、私も原子力の将来に夢を抱き、その発展に生涯を捧げようという決意が、次第に固まってきた。それから早いもので、50年経過し、いまでは原子力とともに今日まで過ごせたことを、本当に幸せに思っているところである。

(了)